
黒ノ聖杯戦争

minarai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒ノ聖杯戦争

【Nコード】

N2317Y

【作者名】

minarai

【あらすじ】

聖杯戦争それは七人の魔術師が英霊を使い殺しあう儀式。

そのルールが崩壊したとき何かが起こる。

アーチャーvsライダー

ガキン!!

甲高い金属音と同時に、アーチャーの右手の干将が弾き落とされる。

「ぬっ・・・!」

「ちっ!」

アーチャーとライダー、二人の口から苦悶の声が漏れる。

ライダー・・・坂田銀時は渾身の一撃で仕留めそこなったこと、アーチャー・・・エミヤはアサシンの見切ったと踏んだ一撃を防ぎきれなかったことに対してだ。

苦肉も二人の剣士は同じ思いを抱いた。

・・・目の前の男を侮っていたわけではないがどうやら推測よりずっと難敵のようだ、と。

ライダーは真剣を構えアーチャーを睨んだまま動かない。

「フム、どうしたのかなライダー、攻めるなら今だろう?この通り万全とは言い難いが?」

不敵な笑顔を浮かべ、空いた右手をアピールするかのようにな平を広

げる。

ライダーもまた不敵に笑い

「いやいや、昨日のガキ」といい、目の前の正露丸といい「手品」が得意らしいからな。迂闊には・・・!」

「っ!」

自らの言葉も言い終わらない内に白髪侍は一瞬で距離を詰め刀を振り下ろし、それを赤い騎士は咄嗟に投影した「右手の干将」と左手の莫耶を交差し止める。

ガキン!

またも夜の学園に金属音が響く。

アーチャーは「ふう」と一息を吐き

「迂闊には何かね?」

「それはな、とb・・・!?」

先ほどのお礼とばかりに、唐突にライダーの刀を弾き胴を二つにするべく干将を振るう。

ライダーはそれを、常人をはるかに超える反応で屈んで避け、横なぎの一閃を払う。

・・・そう、ライダーの身のこなしは達人の領域だ、並の相手ならこれで終わったらだろう。

しかし残念かな、「聖杯戦争」において殺しあう相手が並であることなどないのだ。

それが例えどんな「聖杯戦争」だろうともだ。

ましてや、このアーチャーは今回の聖杯戦争で唯一の「本当」の英霊だ。

一筋縄ではいかないだろう。

この戦いは、これから始まる長い長い夜のほんの始まりにすぎない。

そうとも、夜はまだまだ続くのだ。

アーチャー vs ライダー（後書き）

各原作から1〜6人くらいしか登場しません。

初めての投稿なので誤字脱字が多いと思います。 見つけ次第訂正します。

プロローグ1 ある騎士の世界

ここは誰かのために戦い続けた、ある騎士の世界

第五次聖杯戦争。

その最後の戦いを見届けた赤い騎士は自らのマスターに「何の後悔もない」という顔で

「大丈夫だよ遠坂、俺もこれから頑張っていくから」

そう言っようやく傷ついた体を休めた。

消えていった彼の笑顔は「正義の味方」を目指していた
いつかの少年そのものだった。

・・・戦いを終えた赤い騎士は本来ならばこのまま座へと還るはずだった。

しかし、

願いと

陰謀と

偶然と

必然が

複雑に絡み合い、

彼は再び「正義の味方」として誰かを助ける機会を得ることになる。

プロローグ2 とある小さな魔道士の世界

とある小さな魔道士の世界

「私はただの失敗作で偽物なのかもしれません。

アリシアになれなくて、期待にこたえられなくて。

いなくなれって言うなら、遠くに行きます。

だけど、生み出してもらってから今までずっと、今もきつと・・・！

母さんに笑ってほしい、幸せになってほしいという気持ちだけは本物です。

私のフェイト・テストロッサの本当の気持ちです。」

小さな魔道士は万感の思いを込めて、最愛の母に手を伸ばす。

「・・・。」

彼女の使い魔アルフもそれを見守っている。

この間にも、「時の庭園」の崩壊は進む。時間はあまりない。

自らの娘の告白に対し、

プレシア・テストロッサは「フツ・・・」と鼻で笑い、言った

「帰らないわ・・・」

九つのジュエルシードをさらに稼働させる。

「私は行くわ、アリシアと一緒に・・・!」

「母さん・・・!!」

「言ったでしょ、私はあなたが大嫌いだって」

崩壊の速度は上がり、

プレシアは永遠の眠りにについているフェイトの「オリジナル」であり、「姉」である

アリシア・テストロッサと共に「虚数空間」へと落ちていった。

「母さん!アリシア!」

家族が消えていった虚数空間へ手を伸ばすフェイト。

「フェイト・・・!」

それを止めようと、アルフが駆けよる

・・・ここから、歴史が変わります。

否、微かに変わり始めた歴史が大きな変化を出し始めたのだ。

――
――
――

「!!」

フェイト!!」

「え・・・？」

主の危機に気付き全力で走りだすアルフ

大きな瓦礫がフェイトへと落ちてきたのだ

半ば呆然としているフェイトではそれを避けない

「フェイトちゃん!!」

この場に居合わせたもう一人の小さな魔道士、高町なのはも声を上

げる

「ぐう！」

フェイトへと飛び込み、瓦礫をよける

ところが飛び込んだ先には既に足場などなかった。

そしてフェイトとアルフは虚数空間へと落ちていった。

第一夜

Fate / stay night

side フェイト

私は寝てるような起きてるような不思議な感覚の中にいた。

そして思い出す、

ジュエルシードを探しに次元を超えて海鳴市へ行ったこと

そこで出会った白い女の子のこと

そして私の母さんのこと・・・

・・・そうだ、私は母さんとアリシアの消えていった虚数空間へ落ちてしまったんだ。

私を庇ってくれたわたしの使い魔アルフを巻き込んで

あれからわたしはどうなってしまったのだろうか？

もしかして死んで・・・

「・・・イト・・・！・・・エイト！」

そこまで考えて私を呼ぶ声が聞こえた。

そして気付いた・・・私はまだ起きてないことに。

じゃあ起きないと・・・

「・・・ん」

「フエイト！！」

目を覚ますと目の前には私の自慢の使い魔がいた。

アルフは泣きながら私に抱きついて私の名前を呼び続ける。

「大丈夫、大丈夫だよ」

あやすようにアルフの頭をなでる。

「大丈夫じゃないよ！ずっと目を覚まさないから死んじゃったのか
と思ったじゃないか！」

「ううん、大丈夫。・・・ごめんねアルフ。」

心配させちゃって・・・。心の中でそう付け足す。

「フェイトが無事ならそれでいいよ。」

そう笑って（まだ涙声だったけど）今までうつ伏せだった私を手を
差し出して起きあがらせてくれた。

立ち上がって周りを見渡して気付いた。

「ここ・・・海鳴市？」

私がジュエルシードを探しに来た海に隣接した街だ。

「うん、そうみたい。」

ここは海鳴市の公園で、周りに人はいない。

あたりは暗いしもう夜みたいだ。

「私たち虚数空間に落ちて・・・その後どうなったか覚えてる？」

アルフはううんと首を振って

「私も起きたらこの街にいたんだ。すぐにフェイトを探しに飛び回ってたらここにフェイトがいて・・・。」

それより前のことは覚えてないと、アルフは続けた。

「どういうことだろう？虚数空間の下は海鳴市があったってこと？けど、そんなことがあるわけ・・・。」

最後のほうはほとんどひとり言のように自然と口から出た。

「そんなこと気にしても仕方がないよフェイト。」

わからないことはとりあえずアジトに帰ってから考えようよ?」

アジトというのは私たちがこの街にいたときに借りていたマンションのことだ。

たしかに私もそしてきつとアルフも酷く疲れているだろうし、一度マンションに帰ってゆっくりと考えたほうがいいだろう。

そう・・・きつと私は疲れているはずだ・・・

だというのも、起きてからずっと何か大事なことを忘れているような、気付いてないような・・・そんな妙な感覚が続いているからだ。

「そうだね、一度マンションに戻ろうアルフ。」

うん、と頷くアルフと一緒に私は歩きだした・・・いや、歩き出そうとした

「フエイト・・・!」

「うん・・・!」

アルフの警戒を促す呼びかけに返事をする。

そう、歩き出そうとしたその瞬間、空気が一変した。

何かとてつもなく大きな存在がいる・・・！！こっちを見ている・・・！！

感じとった理由は理屈じゃない本能だ。

アルフも同じことを思ったのだろう。今は人間体だが、それでも牙を鳴らしている。

私もバルデッシュを使いバリアジャケットに身を包む。

・・・？

なぜだろうか、バルディッシュを使った瞬間何か違和感のようなものを感じた。

しかしどんどん強くなる「その存在」の威圧感に余計な考えは吹き飛んだ

バルデッシュを構え身構える

そして・・・現れた「その存在」に、私の戦意はもろくも崩れ去った

「ほお・・・ただの小娘かと思ったが、見込みは外れたようだ」

さもおかしそうに嗤いながらこっちに歩いてくる。

背中まで届く長髪を白く染め、右目に眼帯。

左目からは人を、ものを、世界を、あらゆるものを恨んで・・・憎んでいることが、はつきりとわかるほどの感情が漏れ出ている。

水源のように湧き上がる恐怖をこらえて私は聞いた

「あなたは・・・誰ですか・・・!？」

黒いコートに身を包んだこの人は答えた

「九鬼・・・耀鋼だ。」

九鬼耀鋼・・・それが彼の名前らしい。

「あんたいったい何しにここに来たんだい・・!？」

今にも跳びかかりそうな表情でアルフが尋ねる。

そしてこの人・・・九鬼耀鋼はやはりおかしそうに言った。

「こんな夜更けに俺のような存在がここに来たんだ
理由なら検討がつくだろう？」

つかないようなら・・・見込み外れもいいところだ。」

右手に持った「傘」を私たちのほうへ向ける

この瞬間、疑惑が確信に変わった。

そう、この人は

「・・・・私たちの・・敵・・!！」

距離をとるため後ろに大きくジャンプする・・・！

「そうだとも」

「・・・え？」

私が

着地するその瞬間

生身で鉄球をぶつけられたような衝撃が走った。

「あぐっ！！」

後ろにあった、木に叩きつけられ肺から空気が出る・・・意識がかすむ
何をされたのかわからない・・・

うつすらと目を開けると九鬼耀鋼は右足を突き出していた。

まったく見えなかったその攻撃は、私が絶望を感じるのには十分だった。

「せいぜい足掻いて生き延びてみせろ、さもない俺がただの小娘を殺したことになるからなあ・・・！」

九鬼耀鋼くき しょうこうが嗤う

「フェイト！？こんのおおおおおお！！」

アルフがあの人に向かって飛びかかる

「・・・アルフ！だめ！」

なんとか声を絞り出す。けど、それはもう遅くて

「・・・・・・・・」

九鬼耀鋼は飛びかかるアルフのパンチをわずかに体を屈めて避けると、そのまま手刀を首に打ち込む

「がっ！うう・・・！」

そのままアルフは首に手をかけられ持ち上げられていた。

「アルフ！！」

起き上がろうとするが体に力が入らない

既にアルフには意識がない。

きっとあの人少しでも力を込めれば、たやすくアルフの首は折れるだろう。

アルフの首を掴んだまま九鬼耀鋼は目だけを私に向けて聞く

「これで終わりか？」

瞬間、私は悟った

私がこのまま何もできなければ、あの人はためらいなくアルフのこ
とを殺す。本当に何のためらいもなく。

「や、やめて・・・」

私は力なく訴える。体は動かない。イヤだ、イヤだ！

九鬼は嘆息し

（イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！）

「そうか」

そう言っ

手に

力を

「―――投影、開始トレースオン」

そんな言葉が聞こえる、前か後か
後ろからまばゆい光が差し
そして

「つつなに!？」

無数の剣が、九鬼耀鋼に襲いかかった。

アルフを離して避けることに必死な九鬼耀鋼を呆然と見ていると

後ろから足音が聞こえた

振り返ると

双剣を手にした―――赤い騎士がそこにいた。

赤色の騎士は私のほうを向き

「君が――私のマスターか？」

そう・・・問いかけた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2317y/>

黒ノ聖杯戦争

2011年11月6日06時16分発行